

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 原田範行

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 高宮利行
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授 海保眞夫
文学研究科委員

副査 ケンブリッジ大学英文学部教授
ハワード・H・アースキン=ヒル (Howard H. Erskine-Hill) Litt.D.

学識確認 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之
文学研究科委員 Ph.D.

論文題目 'Literature in the Making: A Study of Samuel Johnson's Early Career'
(文学の誕生—サミュエル・ジョンソンの初期作品群に関する研究)

論文の要旨

原田範行君による博士号請求論文の目的は、18世紀イギリスの文豪サミュエル・ジョンソン(1709 - 84)の初期作品群についての考察を行い、これを通じて、近代的な「文学」の概念に関わる重要な諸要素が現出してくる過程の一側面を明らかにしようとするにある。本論文の全体の構成は、以下のような3部、8章の構成をとり、その前後に序論と結論を配する。

Introduction: Johnson's Complexity in His Early Career

Part I: Facts and Imagination: Johnson's Attitude towards History, Biography, and Prose Fiction

Chapter 1: Johnson's Attitude towards History

Chapter 2: An Imaginative Journey to an Alter Ego: *Life of Savage* Reconsidered

Chapter 3: Tempus omnia revelat:

Rasselas Reconsidered from Johnson's Consciousness of TimePart II: Literary Creativity in Verse: A Study of Johnson's *London*, *The Vanity of Human Wishes*, and *Irene*Chapter 4: Creative Mind in the Making: The Impasse of *London*

Chapter 5: Regeneration from Vanity:

Johnson's Satiric Mode in *The Vanity of Human Wishes*

Chapter 6: From Verse to Prose: Failure in *Irene* Reconsidered

Part III: Concepts and Reality: Johnson's Shakespeare Criticism and His Relationship with Print Culture

Chapter 7: Individuality in Johnson's Shakespeare Criticism

Chapter 8: Johnson and Print Culture:

A Study of Bibliographical Problems in *Rasselas*

Conclusion

「文壇の大御所」として、またジェイムズ・ボズウェルの伝記の主人公として、ジョンソンに関する従来の研究は多い。しかしながら、少なくとも次の5つの観点から彼の業績を検討しようとする時、実は先行研究が必ずしも十分ではないことに気づく。すなわち、1) *The Rambler* (1750-52) 刊行以前の初期作品群に関する個別的作品研究ならびにこの時期の伝記的記録に関する包括的研究、2) ジェイムズ3世の即位(1760)以前の彼の複雑な政治姿勢、特に、スチュアート王家への忠誠心ないしは郷愁に基づくジャコバイティズムの再評価、3) 古典主義からロマン主義へと著しく変容した韻文作品史におけるジョンソンの位置づけ、4) 道徳的・教訓的随筆とは別に、例えばシェイクスピア批評などを通じてジョンソンが具体的に示した、文学作品の構造や人物描写、言語表現の特徴などに対する彼独自の視点や解釈に関する考察、5) 近代的な様相を現し始めた当時の出版文化と彼が取り結んだ関係を、伝記的な視点からだけでなく、創作活動の実際的な場面において検証する考察、である。例えば、ジョンソンの初期作品群については、既に Thomas Kaminski, *The Early Career of Samuel Johnson* (1987) などの研究成果があるが、Kaminski は、対象とする時期を 1737 年から 46 年までに限定し、また「作家としての成長」の伝記的経緯に主眼を置いているため、具体的な作品論を展開するには至っていない。ジャコバイティズムについては、現在、世界的な規模で論争が行われており、従来、この分野での代表的な研究書とされてきた Donald Greene, *The Politics of Samuel Johnson* (1960; 1990) に対して、例えば *Samuel Johnson in Historical Context* (ed. J. C. D. Clark and Howard H. Erskine-Hill, 2001) などの歴史研究が提示されているが、これらを有効な形で作品研究と結びつける視点は依然として少ない。18 世紀における韻文の変遷については、「古典主義からロマン主義へ」という推移が文学史において常に語られるところであるが、詩作を含めた文筆活動がこの両時期にわたり、また *Lives of the English Poets* (1779-81) に代表される詩人論を発表しているジョンソンの位置づけについては、その散文作家としての特質が強調されてきたため、まとまった研究は驚くほど少ない。彼自身の韻文による戯曲 *Irene* (1749) や Shakespeare 批評をも視野に入れると状況はさらに深刻である。このシェイクスピア批評についても、校訂作業の詳細をより包括的に彼の文学観や文学作品と結

びつけて論じる考察は、例えば Fred Parker, *Johnson's Shakespeare* (1989) などに限られており、校訂者あるいは辞典編纂家としてのジョンソンと、例えば *Rasselas* (1759) のような作品を創造する作家としてのジョンソンが別個に存在しているかの印象は否めない。さらに、当時の出版文化とジョンソンの関わりについても、例えば、ボズウェルが記すような伝記的記述は多く存在するものの、実際の出版事情を作品解釈の基礎とする研究は少ない。*A Bibliography of the Works of Samuel Johnson* (compiled by J. D. Fleeman, 2000) がこの分野での研究成果の白眉であるが、ここに集積された情報を有効な形で作品理解に結びつけていくことは、なお今後の課題となっている。

以上のような諸点を踏まえた上でジョンソン研究を進めていく場合、その対象を緩やかな形で初期作品群に絞ることは、有効な手段の一つであると思われる。なぜならば、習作時代から *Irene* までの彼の経歴には、代表的な韻文作品である *London* (1738)、*The Vanity of Human Wishes* (1749) が含まれるのみならず、シェイクスピア全集 (1765) 編纂や *Dictionary* (1755) 編纂の第一歩が記されているからであり、*The Gentleman's Magazine* への寄稿を中心に、議会記事、随筆、伝記、フィクションなどの散文執筆の基礎が築かれた時期でもあるからである。もちろん、1742 年のウォルポール政権の瓦解、45 年のジャコバイトの乱などの政治的動揺の中で、なお無名作家であったジョンソンの政治姿勢が次第に確立していく時期でもあることは言うまでもない。「大御所」としてのジョンソンではなく、後に発展するさまざまな要素の萌芽が混在し、時に相反しながら、次第に方向性を見出していく過程を看取できるのが初期作品群であり、そうした中にこそ、先に述べたジョンソン研究の課題を解決していく一つの道筋を見出すことができると考えられるのである。論者が初期作品群への限定を「緩やか」にしたのは、*A Voyage to Abyssinia* (1735) の翻訳に端を発する *Rasselas* 執筆や、一度は挫折したシェイクスピア全集編纂のように、先行研究における初期、中期、後期という区分が必ずしも有効ではないこと、しかしながら、*Irene* の挫折と *The Rambler* 執筆開始との間に、やはりある程度の区分を設定することが妥当であると考えた理由によるものである。

本論文は、以上の内容を整理しつつも具体的な作品分析を論述に反映させるために、大きく 3 つの部門が設定されている。第一に、事実と想像が作品において拮抗し、そこにさまざまなジャンルが混交する初期作品群の特質を踏まえて Part I を設定し、この問題を、歴史観、伝記執筆、フィクションの 3 点から具体的に考察した。歴史観を論じた第 1 章では、まず、ジョンソンの歴史に対する認識が、リッチフィールドでの生い立ちと類いまれな読書体験に基づいて涵養されたことを検証し、このようにして育まれた歴史認識が、個別的な事実確認へと向かう 19 世紀以降の歴史学におけるスタンスとは異なるものであったこと、しかし、例えばハーレー侯爵蔵書での作業などにもうかがえる通り、そうした彼の歴史認識が、事実を軽視するという性質のものではなかったこと、むしろ確固たる事実を把握した上で、その中に宿る人間社会の普遍性を探求していたこ

とを明らかにした。「事実確認としての歴史を軽視した」とは 20 世紀に至るまでジョンソンの歴史観に関する一般的な見方であったが、好古家批判などをテーマとする彼の代表的エッセイではなく、初期作品群やその当時の彼の経歴に注目することで、事実と想像のはざまに苦悩する彼の实像を照射することを試みたものである。第 2 章において論じた伝記もまた、事実と人間の想像力のはざまに成立する文学ジャンルである。特に、単なる life writing ではない biography としての伝記の確立に関して、ジョンソンの初期伝記作品群（いずれも *The Gentleman's Magazine* への寄稿）から *Life of Savage* (1744) への成長は重要である。この過程で彼は、伝記執筆における事実の重要性を知る。*Life of Savage* における事実の記録は、類書の抜粋に近かった初期の伝記作品とは決定的な違いがある。しかし彼はここでも、事実一辺倒の記述をよしとはしない。記述の基本的なスタイルは、結果としての事実と別の可能性を併記する二分法であり、この二分法に基づく語りによって、主人公の人生が有する多様性を浮かび上がらせ、またそうすることで結果的に作者自身の存在をも明示する。作品世界に対する作者の存在にきわめて意識的であった当時のフィクションにも通じるこうした手法は、やがてボズウェルにも受け継がれていった。そうした過程で、聖者伝や年代記の域にとどまっていた life writing は、文学ジャンルとしての biography へと変容していく。それでは、純然たるフィクションに彼はいかなる姿勢で臨んだか。第 3 章で取り上げた *Rasselas* は、初期作品群の範疇からは外れるが、敢えてこの一章が設けられた理由は、事実と想像のはざま、あるいはその境界線の設定に腐心した彼が、フィクションとしての作品世界をいかに構築したかということを示すためである。従来から指摘されている通り、この作品のプロットは、*A Voyage to Abyssinia* などの記述を参照しつつも、基本的にはジョンソン自身の思索を反映させたものである。ただ注目すべきは、彼の実人生の記録からも明らかのように、その思索は必ずしも悲観的な結論に終始しない。アビシニアへの帰国と幸福の谷への帰還とを同一視すべきではないという点を論証することで、本章ではまず、従来支配的であった悲観的な作品解釈を斥けた。その上で、探求の旅の継続性を暗示することが、事実と想像のはざまに苦悩する自らの文学的足取りを支えようとする意志表明となっていることを指摘している。その意味で *Rasselas* は、純然たるフィクションとは言えない。しかし、同時代の散文フィクション（小説）に批判的であった彼は、登場人物が繰り広げるフィクションとしての作品世界を自らの思索に収斂させる形で、虚構が持つ危うさを克服しようと試みたのであり、そこに、想像力の表象のあり方について初期作品群以降も模索し続けた彼の結論の一つを見出すことができる。

第二部門 (Part II) は、ジョンソンの初期作品群における韻文作品を具体的に考察しながら、彼の韻文執筆の性格、そしてまた韻文作家としての彼の位置づけを、文学史の再考をも視野に入れて検証した。言うまでもなく初期作品群には、彼の生涯を通じての傑作とされる詩 *London*、*The Vanity of Human Wishes* が含まれ、また唯一のまとまった戯曲である *Irene* の執筆は、ほぼ初期作品群全体の時期にわたることから、これ

らの作品分析が基礎とされた。*London*を論じた第4章では、まず、1739年から40年にかけてのリッチフィールド帰省以前の彼の社会に対する視座が、それ以後のものとは大きく異なることを、この詩に表現された都市と田園に対する見解を通じて明らかにした。この相違はまた、詩的表現の技巧上の問題、あるいは混乱としても捉えられるものであり、その意味で、一般の文学史が示す、いわゆる Augustan Poetry の範疇にこの詩を位置づけることの妥当性に論者は疑義を呈した。その上で、こうした相違あるいは混乱の原因が、必ずしもロンドンへの定住を念頭に置いていなかったと思われる当時の彼の伝記的事実に依拠しつつも、しかしそれだけではなく、彼の表現世界とその対象としての社会が、従来 of 古典詩の範疇を越えていくものであったこと、それにふさわしい表現手段を模索する上での相違であり混乱であったことを、同時代の韻文の動向を視野に入れて示唆するに至った。*The Vanity of Human Wishes*を論じた第5章でも、この問題は当然浮上する。*London*と同じく Juvenal の模倣詩として執筆されたこの詩は、しかし、より超越的な視点から社会諷刺が語られ、また技巧的にもより優れて古典的であるとも言える。しかしながら論者は、従来、ほとんど看過されてきたこの詩の結末部分、特に「観察・諷刺の停止」を強く呼びかける 349 行以降の詩句に着目し、古典的諷刺詩の伝統や慣習に決別するジョンソンの強い意志をそこに読み取る。*London*以上に古典的であるかに見えるこの詩は、実は皮肉にも、*London*の段階で既に予示されていた「脱・古典」への彼の企てを、きわめて入念に表現したものであると考えられる。1750年以降のジョンソンが、英詩による創作活動をほとんど停止したこと、彼の経歴の比重が明らかに散文に移ったことは、このことの傍証となろう。一般の文学史ではこの詩を古典詩の系譜の最後に位置づけるものが多いが、この系譜は、既にその最終段階においてかなりの軋轢を内包していたと見るべきであり、初期作品群におけるジョンソンのさまざまな模索の背景には、この軋轢が存在していたことを無視できない。第6章において論じた *Irene* は、1735年以降、10年以上の期間に断続的に執筆されたblank・ヴァースによる悲劇である。Bertland H. Bronson による考察などを除くと、従来、見逃されてきたきらいがある作品だが、まずこの執筆経緯を、大英図書館所蔵の直筆原稿などによって検証していくと、そこには、詩的言語による作品世界の構築に苦悩する作者の姿が浮かび上がってくる。そこに介在する問題は、*London* や *The Vanity of Human Wishes* の場合と多分に重なり合いながら、作劇法という要素も加わって、その複雑さを増す。ジョンソンがシェイクスピア劇をモデルの一つとして考えていたことは明らかだが、悲劇の道徳性と存在意義に拘泥する彼は、その闊達な表現と巧みな進行に全面的な賛意を表していたわけではなかった。しかし、そういう彼独自の理念を劇作に反映しようとするとき、彼の表現世界は、ちょうど *Rasselas* においてフィクションの枠組みを逸脱したように、詩的言語による劇的構成の枠組みを大きく外れてしまう。彼自身、この作品を失敗作としていたことから分かる通り、伝統的な韻文にも、シェイクスピアを範とするblank・ヴァースによる戯曲にも、彼は自らの適切な表現手段

を見出しえなかった。この挫折の経緯こそ、初期作品群を特色づける重要な要素の一つであり、そしてまた中期以降の散文作家としてのジョンソンの誕生を決定づけるものとなったと考えられる。

第三部門 (Part III) は、文学作品という形で表象された彼の文学的・思索的経緯を包括的に捉える視点として、その文学批評における個と普遍の問題を扱いつつ、これときわめて対蹠的な様相を呈する彼の出版文化との実際的な関わりをも射程に入れることで、作品を執筆しこれを出版しようとする際の実態を浮き彫りにしようとしている。第7章では、個と普遍の問題を具体的に扱うべく、ジョンソンのシェイクスピア批評、特に1745年段階からの本文校訂作業に注目したが、この個と普遍の問題は、既に第一部門で論じた事実と想像の問題、第二部門で論じた韻文作品における創造性の問題とも不可分に結びついている。歴史上の事実や伝記作品の主人公、あるいは文学作品の登場人物としての個人を大きく個とし、そうした個別的なものを他の諸事実や人物、ないしは読者を含む人間社会へと想像力によって拡大しようとするとき、それは普遍となるからである。もちろん、彼の後期の業績に属する、完成されたシェイクスピア全集の序文において、彼が個よりも種(species)を重視したことはよく知られている。だが、このことのみで彼の思索の枠組みが普遍に傾斜していた、あるいは普遍性を意識した古典的体系に則ったものであったとするのは早計であろう。シェイクスピア作品の校訂作業の過程で、彼は、時にロマン派詩人以上に、登場人物個々の心理に目を向けており、そのことは、第1章、第2章で論じられた、彼の個別的事実や人物個人への注目と一致する。むしろそれゆえ、彼は個を越えた普遍を探求したのであり、彼がシェイクスピア劇において問題視した作品の理念や道德観というものは、そうした彼独特の視点、あるいは後のロマン派によるシェイクスピア批評とは明らかに異なるバランス感覚の表れであったことを論者は示した。こうした個に対する意識は、形而上的なものにとどまらない。出版文化と彼の具体的な関わりを、既に第3章で取り上げた *Rasselas* を一例として考察した第8章では、まず、当時の印刷出版事情から、彼がこの作品の特に校正をどのように進め、またどれだけ細部に拘ったかを説明した。その拘りは、印刷上の物理的事情によって生じたものから *Dictionary* 編纂者としての言語的関心に至るまで多岐にわたるが、こうした個への具体的な拘りこそ、作品執筆の瞬間における彼の実像なのである。しかしまた彼は、そうした作品の細部への関心にとどまらない、出版文化全体への見識を有してもいた。読者の作品受容やフィクションの功罪を論じた中・後期の随筆、あるいはドズリーやストラーンなどの出版者との往復書簡などからも分かる通り、個別的な文学作品や学術書が蓄積されていくことで形成される文化、すなわち普遍にも、彼は常に意を払っていた。対極に位置する個と普遍を往復するこの強靱な思索こそ、彼の文学の特質をなす重要な要素である。

本論文において論者は、以上のような論証を、ジョンソンの初期作品群に関する具体的な分析として進めた。それは、そうした分析そのものが、今後のジョンソン研究への

一つの貢献となりうると考えたからである。しかしながら、そこから抽出された、事実と想像、個と普遍、あるいは古典的韻文の変容といった問題は、彼自身が当時の文壇において有していた影響力を勘案するとき、一つの時代そのものの本質に関わる問題としての性格を帯びることになる。彼は *Dictionary* において、今日的な意味での「文学」を定義してはいない。彼の初期作品群における模索と苦悩、試行と挫折の経緯は、なるほどそれを今日的な意味での「文学」の範疇で捉えようとするにはいささか困難である。しかしながら、その最晩年の大作 *Lives of the English Poets* が本格的な「英文学史」の嚆矢と目されることから分かる通り、初期作品群に見られる諸要素は、結果として、「文学」に関わる規範整備に接続していくものでもあった。個人の特異な足取りが、次第に大きな普遍的概念として成熟していく—ジョンソンの初期作品群は、そのような道筋を明確に示す具体的な事例となりうることを示して、論者は本論文を結んだ。

審査の要旨

以下、主査の高宮と副査のアースキン・ヒル教授との書簡交換による評価と、2002年12月19日(木)に行った口頭審査の質疑応答の結果を踏まえつつ、審査委員会の所見を要約する。

原田論文は、従来あまりに大きくまた自明のこととして取り扱われた問題であるがゆえに、多くのジョンソン学者に無視されてきた現象に、多数の資料を渉猟しただけでなく必要に応じて第1次資料に当たりながら、真摯に取り組んだ。それは詩人として際立つ存在だったジョンソンが散文作家として際立つ存在に変化したのはなぜか、そしていかにして変化したかという命題である。同時に、ジョンソンの歴史観、シェイクスピアの劇作品における登場人物に見られる個性に関するジョンソン独自の考え、18世紀の印刷文化への密接な関係といった問題も、上記の命題と直接間接に絡んで議論される。

このような考察から明らかになるのは、第一に、ジョンソンが複雑で流動的な時代状況と文学的・社会的伝統の中であって、事実と想像という二重性を常に意識し、それが彼の歴史観においても、揺籃期の伝記文学においても、やはり揺籃期にあった小説というジャンルに対する彼の見解においても顕著であったこと、第二に、初期の韻文作品には、若きジョンソンの旺盛な諷刺精神が巧みに表現されているものの、伝統的な文学様式の中では、そうした二重性に関する十分な記述がなされえず、それが中期以降の散文作家としての彼の経歴を生む必然的な理由のひとつとなっていたこと、しかしまた第三に、そうした自らの文学理念への執着が彼の文学的経歴の支柱となる一方で、彼は現実の政治的状況や印刷出版文化、あるいは時代思潮や文学史的推移にきわめて柔軟に対応しており、その柔軟性が逆に彼の強靱な作品執筆への意志を支えていたと見ることができる、という点である。作品創造への強い意志と柔軟性という、きわめてユニークな結合こそ、ジョンソンの初期作品群から導き出される重要な特質であり、中期以降の彼の文学的業績の礎石となるとともに、近代的な「文学」概念の成立に大きく寄与した。

本論文は第1次、第2次資料を丹念に読み込んだ上に、明晰で洗練された英語を用いて展開されており、すぐれたジョンソン学者としての論者の一面を端的に表している。ジョンソン研究に関する新たな視座を提供するのは現在きわめて困難な状況にあるが、ジョンソンの canon における戯曲 *Irene* が占める位置を特定する作業と、現存する同作品の自筆写本の細心な調査を、論者は議論展開の主軸とした。これは、驚くべきことに、従来ほとんど研究されてこなかったジョンソン学の領域であり、論者の研究結果について、副査のアースキン＝ヒル教授は「二、三の些細な点を除けば、その論は常に判断力にすぐれ、正しい」として絶賛している。

もちろん手放しで本論文のメリットのみを誉めそやすわけにはいかない。論者はジョンソンの詩作品、とりわけ *London* を軽視していると考えられる言説も少なくない。*The Vanity of Human Wishes* が実は諷刺詩ではないと論者は否定するが、だからこそ諷刺詩 Juvenal X のジョンソン版がひととき興味深く印象的な詩に仕上がっているのではないのか。前述したように、論者の *Irene* の成立に関する論旨展開はすぐれているが、その一方、この戯曲は単に文学的な試みとしてのみ評価されており、*Irene* がもつ透徹したビジョンに関する議論は少ない。生涯で唯一世に問うたこの戯曲でジョンソンが世間にまた同胞に伝えたかったのは何かに関する言及にも乏しい。最後に、ジョンソンの詩作から散文への変化は、一見するほど単純で絶対的なものとは考えにくい。論者はラテン詩を含む後期の詩を用いた記録がもつ重要性を認めてはいるが、それは想像力の達成としてではなく、単にジョンソンの実践の結果としてでしかないとする。もっとも本論文がジョンソンの初期作品群を扱っている以上、これらは望蜀といえよう。

卓越した英語で書かれた本論文にも、いくつかの綴り及び文法的な不備が散見される。例えば、5, 13, 15, 25, 68, 72, 109, 157, 169, 182, 209, 226, 書誌の 5, 12 各ページに見られる些細な誤りは訂正されてしかるべきであろう。また遺憾ながら、ジャコバイト学者 Paul Monod の姓が一貫して Monad と綴られている。

原田範行氏は本塾英文科の学部生時代より、首尾一貫してサミュエル・ジョンソンの研究に情熱を捧げ、日本英文学会新人賞を与えられた論文をはじめ、本論文の一部を形成する優れた論考を発表してきた。英文学史においてもきわめて重要な地位を占めるジョンソンについては、当然ながら英米の研究者の手になる多くの優れた著書や論文がある。その中で数度に及びイギリスの諸図書館での調査やジョンソンの伝記作家ボズウェルの子孫との知己を通して、原田氏はジョンソンの初期作品群の成立事情を緻密な資料分析によって明らかにし、文学者ジョンソンの誕生の過程を描ききった。かくして審査委員会一同は、オリジナリティに富む原田論文が内外の研究者の批判に十分に耐えうるものと判断し、文学博士号を授与されるに相応しい論文であると判断する。